

## 近世法華信仰の一考察

——『千代見草』を素材として——

北村 聡

近世における民衆教化の問題は、近世仏教を理解する上に重要な要素の一つと考えられるが、従来の近世仏教研究の上からは、あまり積極的な解明がなされてこなかった。最近では、真宗における「妙好人」の研究など、この点にもスポットがあてられ、その成果もいくつか発表されるようになってきた。日蓮宗にあつては、藤井学「近世初頭における京都町衆の法華信仰」、冠賢一「近世初期京都町衆の法華信仰」、望月良晃「京都町衆の法華信仰」などが挙げられる。しかしこれらの研究は、どちらかと言えば、その視点を被教化者である民衆に置いたものであり、民衆を教化する立場にあつた教団側（教化者）の論理については、あまり明確に触れられていないように思われる。

それゆえ小稿では、教化者の立場にある教団側に視点を据え、かれらがどのような信仰生活・信仰態度を信者たちに要求していたのかを探つてみることにしたい。具体的には、近世日蓮教学の基礎を築いた一人心性院日遠（一五七二—一六四二）の著述とされておられ、法華信仰の実践的なテキストとすることができ『千代見草』を取り上げ、そこに説かれていた法華信仰の具体的内容を見ることによつて、教団にとつての期待される法華信仰者像がどのようなもので

あつたかを考えてゆく。

『千代見草』は上・下二巻に分かれており、その内容は、一貫して人生の無常を考え、それへの対処を具体的に説いている。上巻においては、臨終正念に至る自利の立場から、法華信者の題目による臨終正念の意義とその具体的方法を、下巻では病人に対する看病の功德、死体処理、葬送、死後の法会に至る心がまえやその対処の仕方などを利他の立場から、それぞれ実地的な教示をもつて説いている。しかし下巻の病人の看病の内容は、積極的に病人を快癒させる方法を説いたものではなく、むしろ上巻において説いた臨終正念の具体的実践方法に基づいて、病人を看病しながらいかにして臨終正念に導くか、その方法を病人の実際に即して説いたものであり、その趣旨は上巻と余りかわるところがないように思われる。それゆえ、ここでは上巻の具体的内容を中心にみてゆくことにしたい。

上巻の構成は、つぎの三段に大別することができる。(一)臨終の用意(臨終にあつて心乱れず正法を保ち、臨終正念を迎えるための修行の必要を説いた部分、(二)臨終正念を迎えるための生活態度を説いた部分、(三)臨終正念を迎えるための具体的修行の内容を説いた部分。以下この区分によつて論をすすめてゆくことにする。

まず(一)では、世間の大方の人々は、年を取らなければ死なぬものと思ひ、「さしあたりたる世事にのみ心をかけ、老たるもわかきも、(中略)ぼだいのみちには、無常もおこらず、施物もおしく、聞ものうく心からす」と、んで修行をしようとはしないが、これは誤つた考えであるとし、臨終の事Ⅱ死という問題と、世俗の事Ⅱ生という問題は、互いに別個の問題として存在することはできないとする。すなわち、現世においてなしたあらゆる行為は、臨終の場において

凝縮されて表出するものであるから、臨終の場において表出する相が正しいものであるように、現世において正しい行為＝信仰に支えられた行為（臨終の用意）を心がけることが必要である、と説いている。

このことを承けて(二)では、この臨終の用意も死にぎわに悪念が起れば、功德のないものになつてしまふゆえ、臨終の大事を心にかけて、日頃から悪念の起らないようにしなければならぬとし、「人の命の根をきる時も、つねづねの心のゆがみにしたがふて、心法はおちつくべし。つねづね、ゆがまぬやうにそだつるが、かんよう也。まづまづ十いろの大ゆがみを、ずいぶんためてなすべし」と述べることによつて、臨終の用意の具体的内容の実践において、その前提となる日常の生活態度にゆがみがあつてはならないことを説く。さらには、「此大ゆがみのおこる時は、(中略)まよひのうへのゆがみぞと、正直捨方便の、だいまくの掟木をあて仏種縁起の繩にてむすび、以信得入のちからにて、しめつけしめつけためたらば、心の樹ゆるまずして、命の根切する時は、いかにもすくに、直至道場なるべき也」と示し、この日常生活もそれが法華経の題目の信仰を中心に据えた仏教生活でなければならぬことを要求している。

そして(三)では、この法華経の題目の功德によつてもたらされる臨終正念を、臨終の用意の具体的実践方法を述べることによつて、つぎのように説いている。すなわち、日常の修行として、題目の一念多念の問題と信心の厚薄の問題を提示し、心に染みがない題目の信心が、心から進むように常々題目を口に唱え、題目修行のために励む気持ちを肉親を思うその気持ちまで昇華させ、題目を唱える時は、つねに臨終の一大事を心にかけて、臨終の時は今この時今この時と

思いながら多念に修行することが、つまりは題目の信心の励み方であり、題目の多念の修行の仕方である、とするのである。

以上大難把な把握ではあるが、ここには臨終という生死の問題をテーマとして、臨終正念に至るための法華信仰者の取るべき修行の内容が説き勧められている。いまこの修行の内容をまとめてみれば、つぎのように言うことができよう。

すなわち、臨終正念に至るためには、臨終の一念が正念でなければならぬ。この臨終の一念の正悪は、多念の行功の結果であるから多念に正念を心がける必要がある。それにはまず、善事を実施し「十いろの大ゆがみ」にあたる行為を慎むという態度を養い、法華経の題目を中心に据えた仏教生活を営むことが前提となる。そして、この仏教生活を基盤として、一心に題目に帰依し、題目の信心と多念の修行に励むことが、臨終正念に至る修行であるとするのである。ここで善事と十戒の遵守を勧めているがその内容は、封建社会における世俗的な倫理感とも重なるものである。

つまり、世俗の道徳概念を守りながら、法華経を受持し題目の帰依に裏打ちされた日常生活を送ることが、そのまま仏法就中法華信仰の修行であるとするのであり、このような生活態度・信仰態度こそが、この『千代見草』の著者が期待した法華信仰者の姿であつたと言ふことができるのではないだろうか。

尚、詳細な論稿は『日蓮教学研究所紀要』第三号を参照されたい。